

比較文化論

No.39

日本比較文化学会第43回全国大会
2021年度国際学術大会
発表抄録

於 東京未来大学

2021年9月19日(日)

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

台湾応用日本語学会

日本比較文化学会第43回全国大会・2021年度国際学術大会

〈プログラム〉

- 日 程：2021年9月19日(日)
- 会 場：東京未来大学（遠隔会議室）
- スケジュール：

【午前の部】

- 09:00～09:45 理事会
- 09:50～10:20 総会
- 10:30～11:00 開会あいさつ
近藤俊明（関東支部長・東京未来大学）
開催校講演
角山剛（東京未来大学学長）
「グローバル化の中での研究の視点
ー産業・組織心理学の立場からー」
- 11:00～12:00 シンポジウム
テーマ：「比較文化学のスキームを求めて」

【休 憩】

- 12:00～13:00 東京未来大学周辺の文化を学ぶ（ビデオ上映）
- ① 花畑大鷲神社獅子舞（足立区立郷土博物館提供）
 - ② 鹿浜獅子舞：島氷川神社（足立区立郷土博物館提供）

【午後の部】

- 13:00～15:25 研究発表 分科会：A・B・C・D・E（各遠隔会議室）
- 15:40～18:05 研究発表 分科会：F・G・H・I（各遠隔会議室）

本大会におけるプログラムは、全て遠隔にて実施されます。
各プログラムにおける会議室等のアクセス先につきましては、別紙の大会プログラムを配布致しますので、そちらをご確認ください。
また、各分科会における発表資料は、PowerPoint または Word 等のファイルを画面上にて共有することで活用できますので、各自画面上で共有出来るよう、事前にご用意ください。

シンポジウム

〈 11:00~12:00 〉

シンポジウムテーマ：「比較文化学のスキームを求めて」

- 司会：伊藤 豊（山形大学教授）
- シンポジスト：山下 明昭（大和大学教授）
「比較文化学の探求 -比較文化のスキームを求めて-」
- パネリスト：
 1. 関西支部／中部支部より：
風早 悟史（山口東京理科大学講師）
「翻訳のスキーム」
 2. 韓国日本文化学会より：
林 相珉（韓国日本文化学会文学分科理事・東義大学校助教授）
「文化コミュニケーションとしての外交文書のスキーム」
 3. 台湾日本語文学会より：
頼 雲莊（台湾日本語文学会理事・東呉大学日本語学科副教授）
「日本語学科のUSR への試み」
 4. 台湾日本語教育学会より：
楊 錦昌（台湾日本語教育学会理事長・輔仁大学日本語文学系教授）
「不易流行としての比較文化のスキーム」

研究発表

前半：13:00～15:25

後半：15:40～18:05

【分科会A：教育理論・教育実践】

〈前半〉

司会：金塚基（東京未来大学 准教授）

1. 高橋 栄作（高崎経済大学 教授）
英語らしく発話するには
2. 松井 一美（創価大学 非常勤講師）・平澤佳代（朝陽科技大学 助理教授）
日本語の「今」を取り入れる学習者と「若者ことば」
—台湾の高等教育機関でのアンケート調査から—
3. 関口 英里（同志社女子大学 教授）
地域連携プロジェクトの新たな方策と可能性
——時代に即した文化振興活動と社会貢献の試み
4. 葉 淑華（国立高雄科科技大学 教授）
日本語教育における教育ビッグデータの活用 —MOOC を例に
5. 橋尾 晋平（名古屋外国語大学 専任講師）
日本語の二重主語構文の英訳に関する
初級英語学習者の文産出に関する一考察

【分科会B：文化・多文化理解】

〈前半〉

司会：三浦 卓己（東京未来大学 講師）

1. 謝 碧齡（東呉大学大学院 日本語文学系卒）
不倫行為における日本・台湾婚姻観の比較検討
2. ウォント盛 香織（甲南女子大学 准教授）
国際養子となった戦後混血児研究—
当事者の視点から：『子供たちは七つの海を越えた』をケーススタディに

3. 三井 真紀 (九州ルーテル学院大学 准教授)
保育現場における多文化共生の課題
4. 末田 美香子 (東洋大学 講師)
ビジネス接触場面に向かう留学生の否定的評価と調整
—アルバイト経験の事例から—
5. 石川 隆男 (台湾大学 兼任助理教授)
ディアスポラにみる文化的スキーマ —在台二世の同化と調節—

【分科会C：比較文化①】

〈前半〉

司会：長田元 (富山短期大学 講師)

1. Petra KARLOVA (Palacky University, Assistant Professor)
Shaping Japan's Southeast Asian Studies:
French Influence on Matsumoto Nobuhiro in the 1920s and 1930s
2. 森下 一成 (東京未来大学 教授)
沖縄本島における梵字碑の分布と固有信仰との関わりについて
3. 落合 由治 (淡江大学日本語文学科 特聘教授)
テキストマイニング技術の比較文化リテラシーへの応用
—言語情報の感情分析を応用して—
4. 張 悦然 (九州大学 大学院生)
研究室における大学院中国人留学生の人間関係について

【分科会D：文学①】

〈前半〉

司会：田中 真奈美 (東京未来大学 教授)

1. 丁 若思 (京都橘大学大学院 博士後期課程)
森鷗外『雁』と『金瓶梅』の比較研究

2. 唐 楚輝（関西大学大学院 博士後期課程）
山崎豊子『大地の子』論
—典拠『天雲山伝奇』との比較—
3. 曾 秋桂（淡江大学 教授）
AI 技術のテキストマイニングによる村上春樹文学研究
—『1Q84』論をより総合的に構築することを目指して—
4. 葉 凌（淡江大学 助理教授）
村上春樹『一人称単数』における記憶と生活
5. 黄 如萍（国立高雄餐旅大学 准教授）
横溝正史「双生児」論

【分科会E：言語学・対照言語学・言語教育学①】

〈前半〉

司会：郭 潔蓉（東京未来大学 教授）

1. 常 艶麗（山口大学 東アジア研究科）
日本語自然会話における「話者間反復」に関する予備的考察
2. 東本 裕子（横浜商科大学 准教授）
Flat Stanley Project を活用した英語教育の可能性
3. 陳 志文（国立高雄大学 教授）
「漢語形容動詞副詞形に＋動詞述語節」と「漢語名詞で＋動詞述語節」
との構造についての分析
4. 小山内 大（東京電機大学 教授）
英語教育の中で取り上げるべき異文化の具体例
5. 郭 麗（東北大学 大学院生）
日本語と中国語の畳語についての一考察
—基本色彩語を中心に—

【分科会F：言語学・対照言語学・言語教育学②】

〈後半〉

司会：高橋 栄作（高崎経済大学 教授）

1. 李 善（東北大学大学院 博士後期課程）
中国語の助動詞「能」の用法と日本語の対応表現に関する
対照言語学的研究
2. 頼 錦雀（東呉大学 特聘教授）
同漢字表記語から見る日台言語文化の異同点
—「Xラカ」形式形容動詞とそれに対応する中国語を中心に—
3. 王 天保（淡江大学 副教授）
“用”の意味用法に関する考察
—台湾華語と台湾語の比較を通じて—
4. ムティ・アフファー（金沢大学大学院 博士後期課程）
駅構内における日本語とインドネシア語の禁止サイン
—禁止情報以外の表現の分析—
5. 山崎 祐一（長崎県立大学 教授）
発信力の向上を目指した英語教育の実践
～地域の特色を活かした取組を通して～

【分科会G：比較文化②】

〈後半〉

司会：真家 英俊（東京未来大学 准教授）

1. 高橋 強（東海大学湘南校舎 准教授）
日本とアメリカのスポーツ文化比較：高校野球を例として
2. 楊 妍（東北大学国際文化研究科 GSICS フェロー）
近代日本における中国女性像の考察
—『女学世界』を中心に—

3. 大谷 鉄平（北陸大学 講師）
「話題の～」を伴う記事見出し文が「事実上の広告」と解されるとき
— 関連性理論に基づく解釈可能性の記述として —
4. 侯 宜卓（東北大学大学院 博士後期課程）
食感表現に関するオノマトペの日中対照研究

【分科会H：比較文化③】

〈 後 半 〉

司会：杉本 雅彦（東京未来大学 教授）

1. 孫 蘇渝（東北大学大学院 博士後期課程）
ハリウッド映画『彩られし女性』（1934）における
“他者化”される中国
2. 李 恵慶（大阪経済法科大学 客員研究員）
北朝鮮人権映画『愛の贈り物』の政治的無意識を読む
—— 「父」の不在と「愛」の重層性を中心に ——
3. 森崎巧一（京都経済短期大学），小路真木子（京都経済短期大学）
郭潔蓉（東京未来大学），高木亜有子（湘北短期大学）
円検出ツールを活用した印象評価分析法の可能性

【分科会I：文学②】

〈 後 半 〉

司会：近藤 俊明（東京未来大学 教授）

1. 夏 逸慧（東北大学 研究員）
文学作品にみられる笑いのオノマトペの役割
— 「ホホ」の類型語を中心に —
2. 范 淑文（台湾大学 教授）
岩井俊二『リップヴァンウィンクルの花嫁』に語られる社会問題
—— ポスト3・11の視座より ——

3. 堀 秀暢（津山工業高等専門学校 講師）
『シルヴィとブルーノ』および『シルヴィとブルーノ完結編』に見られるARおよびVR要素
4. 山口 裕美（津山工業高等専門学校 准教授）
『小泉八雲英文学史』からハーンが語るバイロン像を読み解く
5. 朴 相鉉（慶熙サイバー大学 教授）
植民地朝鮮における万葉集の朝鮮語訳

各分科会は、別紙の大会プログラムに記載してあります会議室 URL よりお入りください。各発表の要旨は、ページの右肩にある記号をご確認ください。記号は、「分科会 - 発表順番号」（例：「A-1」は、A分科会の1番の発表を示します。）の形式にて表示されております。

日本比較文化学会第43回全国大会運営委員会

運営委員長：近藤俊明（関東支部長・東京未来大学）

運営委員：杉本雅彦（東京未来大学）・高橋栄作（高崎経済大学）

田中真奈美（東京未来大学）・東本裕子（横浜商科大学）

長田元（富山短期大学）・真家英俊（東京未来大学）

三浦卓己（東京未来大学）・森下一成（東京未来大学）

運営事務局：郭潔蓉（東京未来大学）・金塚基（東京未来大学）

（五十音順）

10:30～11:00

開催校講演

グローバル化の中での研究の視点 -産業・組織心理学の立場から-

角山 剛（東京未来大学学長）

この度は、歴史ある日本比較文化学会第43回全国大会を本学で開催いただき、大学を代表して御礼申し上げます。

私の専門は産業・組織心理学で、組織における人間行動を研究していますが、近年ITの爆発的な進化によって、組織をとりまく環境も、組織の中で人の行動も、大きく変化しています。グローバル化に伴い組織構成員もさまざまな国や人種が入り交じり、文化や習慣の違いが仕事の上でもさまざまな摩擦を生むことも少なくありません。

社会心理学者ニスベットの、アジア人と欧米人の思考はどのように違うのか、それはなぜなのかを実証的に探り、多くの興味深い知見を紹介しています¹⁾。もちろん、世界規模で人的交流が広がり、文化の出会いや融合の度合いが高まっている今日では、「西洋対東洋」という単純な二分法ですべてを語ることはできず、それはニスベットも指摘しているところです。ただ、育った文化によって思考様式が異なってくるとすれば、それは組織においても国や文化を異にする従業員間の行動の違いとなって現れるでしょうし、仕事の進め方にも違いが出てくるでしょう。実際、海外企業との交渉場面での異文化摩擦や、海外赴任先での思いもよらない異文化体験の実際が、多くのビジネス書などでも取り上げられていることは、皆さんご存じの通りです。

私のこれまでの研究の中では、こうした文化比較を直接扱ったものはありませんが、海外の研究で得られた興味深い知見がそのまま日本に当てはまるかどうかについては、常に注意を払っています。本日はそうした視点での私たちの研究を、ごく簡単にですがいくつかご紹介したいと思います。

グローバル化が進む中、異なる文化的背景に起因するすれ違いや摩擦を防ぐためにも、互いの文化が持つ異同を理解し、異なるものを排除するのではなく、互いを認め歩み寄る意識がますます重要になってくるものと思います。

1) Nisbett, R. E. (2003). *THE GEOGRAPHY OF THOUGHT ~How Asians and Westerns Think Differently... and Why.* (村本由紀子訳「木を見る西洋人 森を見る東洋人」ダイヤモンド社 2004)

11:00～12:00

シンポジウム

テーマ：比較文化学のスキームを求めて

シンポジスト発表要旨

比較文化学の探求 -比較文化のスキームを求めて-

山下 明昭（大和大学 教授）

事務局から次回開催予定のシンポジウム「比較文化学の探求—比較文化のスキームを求めて—」の叩き台となる話題提供役をせよとの命を受けた。「～の探求、～のスキームを求めて」とあるので今、過去を踏まえながら未来に向けて私見を述べる。これらが議論の口火となれば幸いである。

さて、他の学会でも投稿出来るような研究ではなく、日本比較文化学会だからこそ投稿したいという論文なるものは何か、または日本比較文化学会学会誌ならではの研究論文とは、はたまた比較文化の研究手法とは何か、そしてそのスキームとは？文化の比較は、「スキーム」と「スキーマ」の違いを比較するような単純な探求ではない。

所で、現在は、まだスタニスワフ・レム氏作の SF 小説「ソラリス」や手塚治氏の作品「鉄腕アトム」のような世界までには至っていないが、専門分野でさえ猛スピードで陳腐化していく時代である。これまで人間にしかできなかったことが、AI（人工知能）【Artificial Intelligence】と協働しながら推進する時代が来るかもしれない。東京大学大学院技術経営戦略学専攻の松尾豊特任准教授によると知的分野も AI に取って代わられるということもそんなに遠い世界ではないと述べている。2030 年頃には、今の AI の概念を超えた次世代の AI が生まれていると予測する研究者もいる。AI と人間を比較すると、その境目は、生物か否かになるのであろうか。AI が人間を超える時それは、SF 小説「ソラリス」のような世界となっていくのであろうか。それともアトムやウランが我々の介護を担当していたり、仲間や家族として極当たり前のように共存する社会になっているのであろうか。未来の比較文化学会にも「AI 人間」の査読委員が学会の仲間として協同するようになり、その「AI 人間」自身が AI と認識することさえなくなり、高度に人間化したとき、益々人間とは、AI とは何かという比較研究が重要になってくるような気がする。その比較を人間と思いついでいる AI 視点で行うのと、生物的人間視点で考察するのとでは、それぞれにどのような論文が紡ぎだされるのであろうか、査読の中立性は、担保されるのであろうか。未来の世界にまでいかなくとも過去、現在において査読の中立性は担保されてきたのであろうか。哲学者のミッシェル・フーコーが述べるようにその時々時代、それぞれの地域

において価値観が存在してきたと述べている。それは価値観という視座が揺れるということであろうか。今から 40 年ほど前の論文に英語からみたネイティブアメリカンの話す言語や日本語との比較研究論文の中に英語が上位の言語であるがごときの論文が発表されていた時代がある。これなど視座の中立性の意識が全く欠如していた典型例ではないだろうか。

近年の投稿論文の傾向は、比較という観点からアジア、ヨーロッパの文化研究、外国文化研究、日本文化研究、文学、芸術、思想、宗教、歴史などの学問分野を相互に横断するという意味での「比較」研究の視点から「多文化主義研究」や「現代比較文化研究」へと広がりが見られる。これらの論文に対してまず、日本比較文化学会が言明する「諸文化の比較研究及び比較研究の方法論に基づく諸学問分野の研究を促進し、多文化間の理解と交流及び学際的な学術の発展と交流に資する」という目的を踏まえているのか、次に比較における異なった現象の背景に「共通性」や「類似性」の存在という視座を踏まえながら「異質性」を考察しているか、即ち全く表面上に現れた異なるものをただ単に「比較」するのではなく、顕在、潜在を問わず何等かの似たものを「参照点」にしながら「比較」という視野を取り入れた研究分科を基本線としているのか、「共通性」「類似性」を踏まえながら「異質性」を考察しているのかを「参照点」として研究論文を拝読させて頂いている。話題提供者として、比較研究者の視点は、視座はどこにあるのかということである。繰り返しになるが、高度な「AI 人間」視座で行うのと、生物的人間の視座で行うのとでは異なってくるのではないだろうか。それぞれの視座からどのように比較したのか、それぞれの視座を明らかにすることが重要であると考えられる。しかし、視座の位置を明らかにするのは容易ではない。深く考察すればするほど分からない世界で迷子になりそうである。「ソラリス」の中に「分からなさを引き受けながらも答えを求め続ける」という表現があるが、このような感性が比較文化学会の「比較文化学の探求者」である我々にも重要な示唆になるのではないだろうか。この感性を磨くためにも比較文化学の探求を続ける中で「ワクワク」や「ドキドキ」と遭遇することで「知的好奇心」が研ぎ澄まされ、このことが他者を、多文化を感じる感性を豊かにしてくれるのではないだろうか。知識に裏づけられた知性をもとに、異なった知識や考え方に対して尊厳と共感を持ちながら傾聴するような心持ちで「比較文化的コミュニケーション」をする必要があるのではないだろうか。言い換えれば、研究者は、この分からなさを謙虚に深く肝に銘じながら、そしてこの分からなさをエネルギーにしながら比較探求を続けることが未知への「比較探求研究冒険者」としての必須「感性」なのではないだろうか。

翻訳のスキーム

風早 悟史（山口東京理科大学 講師）

「共通性」を踏まえながら「異質性」を探るという比較文化研究の基本姿勢は、外国文学の翻訳にも当てはまる。翻訳理論家のローレンス・ヴェヌティ（Lawrence Venuti）は、「同化（domestication）」と「異化（foreignization）」という二つの翻訳方略を区別した。前者の同化翻訳では、翻訳者は起点テキストを目標言語の文化になじませることを重視する、つまり、読者が違和感なくすらすらと読めるような文章で翻訳を進めていく。一方の異化翻訳とは、いわば、翻訳を翻訳として読んでもらうための方略であり、そのためには、「読みやすさ」が犠牲にされることもある。

米国と英国の英語による同化翻訳の優勢に対して批判的なヴェヌティは、異化翻訳の重要性を強く訴えているが、一つの翻訳においてどちらの方略が優先されるかは、起点テキストそのものの性質に加えて、その時々目標文化の状況など、様々な要素に左右される。ヴェヌティのように、過度に同化を求めてくる目標文化への抵抗として異化翻訳を推奨する訳者もいれば、反対に、同化翻訳が功を奏する場合も考えられる。たとえば、目標文化にとってきわめて異質なテキストを翻訳するようなとき、そのプロセスに関わる者がまず考えなければいけないのは、そもそも、読者の作品への入口をどのように作るかということだろう。2014年にペンギン・ブックスからペーパーバック版が出たロイヤル・タイラー（Royall Tyler）による英訳『平家物語』（*The Tale of the Heike*）の裏表紙に記載されている作品紹介は、『平家物語』を「日本の『イリアス』（“Japan’s *Iliad*”）と形容している。このような結びつけは、英訳読者の新鮮な『平家物語』体験をあらかじめ限定してしまう余計な枠として非難されるかもしれないが、一方で、その読者の『イリアス』への見方を変え、ひいては、目標文化における『イリアス』の地位そのものにも変化をもたらす可能性があるという点では、積極的な「スキーム」としての同化翻訳の一端と見なせるだろう。

翻訳者は同化と異化という二つの方略の間を行き来しながら一つのテキストを別の言葉で書き換えていく。その翻訳方針が、訳者個人の資質や好みだけではなく、訳者が関わっている起点文化と目標文化の様態によっても形成されるものであるとするならば、翻訳とはまさに比較文化的な実践であるといえるだろう。

文化コミュニケーションとしての外交文書のスキーム

林 相珉（韓国日本文化学会文学分科理事・東義大学校助教授）

最近、韓国では4次産業革命やポストヒューマンという言葉が流行し、単なる経済分野だけではなく、文化や教育、そして研究の領域においてもこれをテーマにした多くの論文が発表されている。特に、革命の本質は「自動化」であり、AIが複製できない人間の創造性や共感能力、そしてコミュニケーション能力などが不可欠の要素として浮かび上がってくる。

今回、シンポジストの山下明昭先生の「比較文化学の探求—比較文化のスキームを求めて—」もそういうパラダイムの変化を踏まえた問題提起だと思われる。そして、「人間と見込んでいるAIの視点」と「生物的人間視点」の違いから「視座の中立性」を保つことの難しさを認識しつつ、それを回避することなく、ポジティブにその「分からなさ」を引き受けながら「比較文化的コミュニケーション」をする楽しさや感性を強調する。

最近、韓国ではモビリティ (mobility)、相互遂行性、文化交渉などの文化コミュニケーション論が注目されている。これらの用語は言葉それ自体は違っても、異文化の研究を単なるAからBへの受容、つまり発信と受信という固定的な図式で捉えるのではなく、AとBの融合によって新たに生成する「何か」に注目する。(韓国のアイドル界では「NCT」「トゥワイス」「ロケットパンチ」のように、日本人メンバーが参加して、新しい文化を創り出しているケースが多く見られる)そして、その「何か」は異文化の他者との出会いの時だけではなく、同じ国や組織の内部でも頻繁に発生しているものでもある。

現在、私は「戦後在日朝鮮人に関する外交文書の収集・改題及びデータベース構築」(韓国研究財団、2020—2026)というテーマの共同研究に参加していて、1945年8月から1989年の間に韓国政府が生産した在日と関係する外交文書を網羅して収集している。例えば、1968年に起きた金嬉老事件に関する外交文書を見てみると、彼の獄中結婚(総連も獄中結婚を積極的に斡旋)や同事件をサポートするために組織された韓国の「金嬉老救出署名運動推進委員会」の訪日に対する認識は、当時の韓国政府や駐日大使、領事、そして外務省の中の橋民科、在外国民科それぞれ全く違っていたことが分かる。つまり、文化コミュニケーションに注目すると、外部の他者を「参照点」にしながら、むしろ内部の「異質性」に目を向ける必要があるのではないだろうか。

日本語学科のUSRへの試み

頼 雲 荘（台湾日本語文学会理事・東呉大学日本語学科副教授）

台湾は、2017年から教育部（文部科学省相当）がUSR（University Social Responsibility）、「大学の社会貢献」概念を推進し、東呉大学日本語学科では2020年5月～12月にかけて、大学の近辺にある「北投温泉博物館」を中心にUSRプロジェクトを展開した。「北投温泉博物館」は1913年築造の、かつて当時東南アジア最大の公共温泉浴場だった建物である。日本統治時代の歴史文化を知るうえで、大変重要な歴史建築物である。

これまで東呉大学日本語学科は、「日本語に精通するとともに日本についての理解を深め、国際的視野に立った中日文化交流が行える人材の育成」を掲げてきた。この目標とUSRプロジェクトをセットに考えられないかが検討された。日本語を専門に学ぶ一方で、われわれはどのようにUSRの求める社会貢献ができるかが課題となった。

そこで、「日本語教育に結び付いた北投温泉の歴史、観光資源の認識および地域創生：新北投地域を中心に」というテーマで、プロジェクトを展開した。学内小規模のプロジェクトで、夏休みを挟み、7か月におよぶこのようなUSRの試みは、教師にも学生にも収穫の多い経験となり、教育的な価値を有するものであった。大学の社会責任として直接地域貢献につながる取り組みはまだまだ少ないが、今回は内容のある「比較文化的コミュニケーション」が実践できたと思う。象牙の塔を離れた、このようなコミュニケーションは地域貢献につながるであろう。さらには「中日文化交流が行える人材」の感性を育てる過程となったと確信している。

不易流行としての比較文化のスキーム

楊 錦昌（台湾日本語教育学会理事長・輔仁大学日本語文学系教授）

山下先生のご見解に基づきつつ、私の所感を以下に述べさせて戴きます。

今回の大会のタイトルに含まれる語は、動作性を有する語と、名詞性を有する語の二つに分けられる。そのうち、研究対象を示すものが「文化」、研究方法を示すものが「比較」、比較方法を体系的に構成するものが「スキーム」である。したがって、タイトル自体にすでに比較文化のスキームが潜んでいると言える。

とは言え、研究対象としての文化は、自国の文化を意味するのか、他国の文化を指すのかについては一考を要しよう。もし自国の文化をいうのであれば、異文化交流¹の機能を持つ日本語そのものや、標準語と方言、現代と古典もその対象に含まれることになる。それに対し、他国の文化をいうのであれば、自国と他国のあらゆる文化を視野に入れなくてはならない。従って、比較文化のスキームを求めるのであれば、研究範疇と対象を明らかにすべきである。

範疇に関しては山下先生とやや異なり、私は過去（古典）を踏まえながら、今と未来に向けた視座に立って考えたい。具体的には、過去の「不易」を、今と未来の新しく独特な「流行」に生かすという視座に立つことである。一方、研究対象に関しては、文化を背負っている言語がその基本であり、とりわけ異文化交流性という特質を持つ日本語が重要であろう。言語には魂や文化遺伝子²の如く容易に変化しない「不易」なものが潜んでいる。また、時代や環境とともにその時代にふさわしい独自の「流行」も生まれてくる。そのため、言葉とその言葉によって育まれた言語文化も比較文化の研究対象にふさわしい。

従って、比較文化のスキームというと、まずゲシュタルト崩壊のようなことにならないように、全面的に不易としての過去、そして流行としての現在と未来に着眼し、過去を踏まえて考察した結果を基準として、現在と未来に照らし合わせて「流行」のある新しく独特な研究成果を目指すという方法を提起したい。このような「不易流行」的なスキームは、AIの時代になっても、効率的にAIを生かし、不易としての不変的な基準を探求したり分析したりすることができる。また、自国内の比較文化にも、自他国間の比較文化にも応用できる。これは、顕在、潜在を問わず何等かの似たものを「参照点」にするという山下先生のご提案と重なるかのようであるが、過去のテキストの不易なものを基準とするという点で本質はいささか異なる。

¹拙著『時代に適応した日本「古典」文学教育』（尚昂文化、2016）を参照されたい。

²那覇市文化協会の基本理念（http://nahabunka.com/group/g_uchinaguchi/）による。